
エスケープ

たつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エスケープ

【Nコード】

N6185H

【作者名】

たつき

【あらすじ】

洋平が目覚めると、廃墟のアパートの一室にいた。押入れには死体。その上に手紙があった。手紙の内容は、ここから出たければ親友を殺せというものだった。そこには衝撃の結末が待っていた！

「……どこだ？ここ。」

洋平は、気がつくのと真つ暗の部屋にいた。

「誰か、いないか？いたら返事をしてくれ。」

返事はない。

その時、いきなり電気がついた。

洋平の目に飛び込んだのは、ボロボロのベッドにたんす、扉が開いている押し入れの中に、寝かされている死体。

その死体の上には一通の手紙。

洋平は、震える足を死体の方向へ向け、歩き出した。

もの凄い異臭が鼻を突く。

震える手で死体の上の手紙を手にとった。

『やあ。洋平君。やっと起きたね。ここは廃墟のアパートだ。このトイレに君の親友の隆宏がいる。その隣には時限爆弾が仕掛けられている。隆宏のいるトイレには、赤外線センサーを張らしてある。つまりドアを開けると、爆弾が起動するということだ。それを止めるには隆宏の腹の中に入っている鍵が必要だ。爆弾が解除されると、出口の扉が開く。つまり、生きてここを出るには親友を殺さなければいけないという事だ。親友を殺さなければ、お前も死ぬことになる。生きるも死ぬも、おまえ次第だ。友人を殺せ。殺せなければお前も死ぬ。』

「……何だ。これ。どういう事だ。」

その時、頭の中にある言葉が残った。

“友人を殺せ。殺せなければお前も死ぬ。”

「……隆宏は助からないのか……」

洋平は、隆宏を絶対助け出すと心に誓い、扉を開け、部屋の外に出た。

外の部屋は真っ暗だったが、隆宏の事を思うと勝手に足が動き出し、外の廊下を走っていた。窓は板で塞がれ、時間も、今立っているこの場所が地上何階なのかも分からなかった。だが、木造なのでそんなに階数はないと思った。

隆宏とは幼稚園からの友達だった。

辛いときは一緒に泣き、嬉しいときは一緒に喜び、悪いことをしたら一緒に謝ってくれた。

その友人が今、死の恐怖に怯えながら俺の助けを待っているなんて……

昨日まで笑っていた隆宏が……

そう思うと、涙が溢れ出してきた。

その時、階段が目に入った。

階段を下りる足音だけが響く。

階段を下りると、『WC』と書いた扉が目に入った。

「ここか。」

洋平は扉の前へ駆け寄り、そこで少し考えた。

センサーを感知させないで、中に入れないか。

爆弾を起動させなければ、隆宏を助け出せるのではないか。

そう思い、考えたが無理だった。

赤外線センサーをよけて通れるわけがない。

仕方なくドアを開けた。

中はカビ臭く、左に和式トイレが3つ並んでいる。

仕切りは全部木でできていて、腐敗してしまっている。

洋平は辺りを見回した。

が、隆宏らしき姿は見当たらなかった。

洋平は仕切りの板を蹴り飛ばした。

木の破片が飛び散り、ホコリが舞う。

洋平は部屋の外に出て、辺りを見回した。

階段と無数のドアしか見当たらない。

とりあえず階段を降りることにした。

また足音が響く。

階段を降りるとまた目の前に『WC』と書いたドアが目に入った。もう降りる階段はない。

目の前のドアを思いきり開けると、2階のトイレと同じ光景が目飛び込んだ。

が、今度は呻き声がある。

奥の区域から。

“うっ……うっ……”

洋平は、その声がある方へ向かっていった。

「隆宏……！」

そこには手足を縛られ、布で口を塞がれ、椅子に南京錠と鎖で縛り付けられた隆宏がいた。

洋平は、隆宏を締めていた縄と布を外した。

「隆宏！どうしたんだ！」

「洋平……何でここに……？」

「お前こそ、何故ここにいる！」

「気がついたらここにいたんだ……」

「……俺もだ。」

その時、ふと隣に目をやった。

手紙の通り、爆弾があった。

「どうするんだよ！」

「どうしようもない。」

デジタル表示板には『9 / 57』と表示されていた。

「9分……」

「お前は逃げる。俺の胃袋から鍵を取り出し、外へ出るんだ。」
隣にはメスが置いてあった。

「無理だよ……！」

「できる。」

「無理……！」

「やるんだ。」

「無理だ！」

「死ぬのは1人で充分だ。」

「充分って……お前が何かしたのかよ……！死ぬような事したのかよ！」

「……」

「俺もここで死ぬ。」

「ふざけんな！」

「お前を自分の手で殺すくらいなら死んだ方がましだ。」

「ふざけんな！」

「お前こそふざけんなよ！簡単に諦めてんじゃねえよ！」

「……」

この瞬間にも刻々とカウントダウンされていく。

「お前がやらないなら俺がやる」

「お前、何言つて」

“オオオオオオオ”

隆宏が自分の腹にメスを入れ、腹を切り裂いた。

もの凄い呻き声が響く。

「やめろ！」

洋平が隆宏の手を押さえた。

隆宏が抵抗する。

その時、隆宏が持っていたメスが洋平の胸に刺さった。

洋平は後ろに倒れ込んだ。

痙攣している。

「わ……わざとじゃないんだ……」

洋平の痙攣が治まってきて、最期にこう言った。

「……ありがとう……」

そこで、洋平の意識が途絶えた。

隆宏は涙を出しながら、メスを自分の腹に当て、思い切り掻き切った。

もの凄い呻き声が辺りに響く。

それでも手を止めることはなかった。

そして、ついに動きが止まり、隆宏が虫の鳴くような声で言った。

「……すまな……か……った……」

そして、隆宏の意識もプツリと途絶えた。

その数十分後、消防車が消火活動にあたり、死体が2体、バラバラになって発見された。

身元が分からないくらいひどく肉、皮が崩れていた。

その後、この事件をメディアが大きく取り上げ、国民に恐怖を与えた。

犯人は未だに不明。

だが、やがてこの騒ぎも収まり、忘れ去られるだろう。

家族や友人、恋人や親戚、そして犯人以外の記憶からは……

(後書き)

最後までお読みいただきありがとうございます。
是非感想、アドバイス、アイデア等をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6185h/>

エスケープ

2010年10月8日15時08分発行